# 縄文王朝論

隠された古代史を探索する会
主幹　雑賀弘行

日本で王朝を唱えようとしても、中国のようにその時の王朝の歴史書存在している訳ではない。僅かに、中国の歴史書に日本のことが記載されている程度です。日本の歴史書で一番古いのが、大宝律令が制定されてからで、『古事記』と『日本書紀』がある。そこには、古い時代を物語風に書かれてあって、真実とはかけ離れている。弥生時代に、北部九州に邪馬台国があったと『魏志倭人伝』で書かれているだけで、日本では実際にあったかは立証されていない。中国のように英雄が出て、王朝を築くという形ではなく、集団体制で邪馬台国の政権を維持していた。大化の改新以後、統一国家として、今までにあった大王を天皇と定めた。その大和朝廷が、天皇の祖を神武天皇とした。古墳時代に各地に大王が存在していたが、飛鳥時代に大王を一本化したと考える。天皇の諡号も奈良時代の学者淡海三船によって決められた。大化の改新以前の日本の歴史は後付けです。現在、考古学や遺伝子の研究が進んで、分からなかった時代が徐々に解明されてきました。そこで、日本の長い歴史の中で、1 万 3,000 年もの歴史がある縄文人にスポートを当てて、縄文人王朝論という仮説を示したいと思います。

先ずは最初に、縄文人の定義から。世間的には、縄文時代に日本列島に住んでいた人を縄文人と。縄文時代が終わり、古墳時代までを弥生人と称した。これは、便宜上の決定で弥生時代に日本列島に住んで人を指している。縄文時代には、中国大陸や朝鮮半島から渡来する人が少なく、縄文人の純血が維持されていた。渡来出来る環境にありながらも、北部九州において東日本の縄文人の人口よりも少なかった。それは、7,300 年前の鬼界カルデラの噴火によって、九州だけでなく、西日本全体に火山灰が降り、不毛地帯になったから。その影響で、九州の人口は縄文時代前期と中期には、100 ㎢あたり 13 人から 14 人程度でした。その頃、東日本の縄文人は縄文文化が生まれた縄文時代前期には、人口も中部地方で 100 ㎢あたり 84 人、東海地方で 100 ㎢あたり 36 人、関東地方で 100 ㎢あたり 134 人、東北地方で 100 ㎢あたり 29 人となっていた。気候が温暖になった縄文時代中期には、中部地方で 100 ㎢あたり 240 人、東海地方で 100 ㎢あたり 94 人、関東地方で 100 ㎢あたり 298 人、東北地方で 100 ㎢あたり 70 人と縄文文化を開花させていた。縄文時代後期になって東日本では、気候の寒冷化と富士山の噴火で人口が減少したが、九州では 100 ㎢あたり 24 人と増え、縄文時代晩期には 100 ㎢あたり 15 人に若干減少したものの、中国や朝鮮半島から水田式稲作が入ってきて、生活水準が良くなり、九州の縄文人だけでなく、中国や朝鮮半島から渡来する人も増えて、増加傾向にあった。また、東日本の縄文人は、畿内の河内湾の沿岸にある森ノ宮遺跡から関東地方の堀之内式土器や東北地方の亀之岡式土器が発掘されていることから、東日本の縄文人は、畿内までやってきて、西日本の縄文人と交流した形跡があり、九州産の土器も発掘されていることから、畿内が西日本と東日本の縄文人が情報を交換する場となっていた。東日本の縄文人は、水田式稲作も西日本の縄文人から伝授されてたようです。青森県弘前市の砂沢遺跡では、弥生時代の水田跡が発掘され、北部九州の遠賀川式土器も発掘されています。

東日本の縄文人も畿内から瀬戸内海経由で、北部九州まで来ていたかも知れません。それだけ北部九州の文化水準が高まっていた。そして、弥生時代前期には人口も徐々に増え、水田の開拓が盛んになり、土地の確保で、隣接する集落との戦いも。さらに、弥生時代の前期後半には、100 ㎢あたり 250 人と人口爆発が起こり、大集落が誕生します。この頃には、九州で縄文時代から生活していた縄文人は、南九州や熊本平野、さらに筑紫平野で大集落を形成していた。そこに長崎県の五島列島から中国南部の人達が合流し、対馬列島や壱岐島から朝鮮半島南部の人達が、北部九州に集結した。

弥生時代中期になって、北部九州から朝鮮半島南部に渡った人もいた。その人達の中で、朝鮮半島南部の伝記ですが、初期の新羅の王になった人もいた。赫居世であり、新羅の宰相を務めた瓠公も日本から渡ってきた人です。紀元前 57 年に新羅が建国されています。また、この人達は前漢が紀元前 108 年に設置した楽浪郡の存在も認識していたし、鉄器の素材も鉱山から取れることも知っていた。そのような人が北部九州と韓国の釜山を往復しました。その人達が縄文の海人系だったとすると、東日本から畿内を通過して、瀬戸内海経由で北部九州に来た縄文人の一部かも知れない。ヤマト王権が誕生したときに参加している可能性がある。その海人系の人達は、鉱山のある朝鮮半島南部も支配下に置くようになった。そして、鉱山から鉄岩石を当初の鉄器生産場所として壱岐島に。その島には、縄文時代から海人系の縄文人が生息し、その人達によって鉄鉱石が運ばれた。応神天皇以来、天皇の後ろ盾になった息長氏もこの壱岐島を支配していたとも言われています。この壱岐島に朝鮮半島の鍛治職人を連れてきて、鉄器を生産した。その鍛治職人が出雲や瀬戸内海経由して淡路島から河内湾を通って、大和の地に。息長氏の他にも古墳時代の豪族で、尾張氏、海部氏、安曇氏も海人系の東日本の縄文人でした。

弥生時代後期から古墳時代に入る頃の日本の歴史資料が乏しい。この時期に中国に使者を送っていたのは、北部九州の小国家であって、如何にも日本国を代表すると中国に認識させていた。中国の後漢では、それらの使者を倭国として扱い、日本を代表する国家として扱った。57 年に北部九州の小国家奴国が中国の後漢王朝に使者を送り、その当時の皇帝、光武帝から「漢委奴国王」金印が贈呈され、日本を代表する倭国の王として認めさせた。それからでも、107 年に後漢の安帝と面会し、倭国の王と認めさせようとした帥升がいる。結局、安帝から金印を貰えずに、倭国の王とは認められなかった。その当時、帥升が日本の王と考えていたのは、北部九州一帯の話で、中国も日本全土をどれだけ把握していたか疑問です。東の島に倭国があると言った認識しかなかった。このような日本の状況で、107 年に北部九州を統一しようとした帥升が失敗に終わり、北部九州で政権争いが起こり、中国の後漢の桓帝・霊帝の時代（148 年～189 年）に北部九州では倭国大乱として『後漢書』に記されているように、政権争いが繰り広げられた。これは、飽くまでも北部九州での話です。そして、邪馬台国の卑弥呼が登場して、北部九州での内乱が収まる。それが、『魏志倭人伝』に記載されている日本の状況であった。時代的には弥生時代の末期にあたり、卑弥呼が政権の座についた 190 年頃から卑弥呼が亡くなる 248 年頃まで。卑弥呼は北部九州の連合国家の中枢として君臨した。そして、卑弥呼が死亡して、壹與の時代になり、いつの間にか邪馬台国は姿を消した。

日本の王朝を考える上で、弥生時代後期からと古墳時代に入ってからです。その当時、各地で縄文人の末裔の中からリーダーが生まれ、稲作を財源とした経済環境が整いました。田畑の所有権と所有地の確保です。それらのリーダーが各地の大王になっていきました。さらに、邪馬台国が

あったとされる北部九州では、南部朝鮮半島から渡来人の工業的技術が入ってきて、特に鉄器の製造や須恵器のような土器を大量に生産する新しい技術が入ってきた。そのような技術者の集団が産まれました。そこで、各地の大王と技術集団との橋渡しをする氏族が現れたのです。その代表的なのが物部氏。物部氏は、各地の大王と契約し、技術集団が製作した鉄器などを食糧と交換するようになった。その物資を運搬するのに海人系の氏族を使うようになって、各地の農産物と工業製品と運搬という古典的な経済圏が芽生えた。その起点となったのが畿内、特に大和でした。北部九州や南部朝鮮半島の技術者を畿内に集結させた。その代表的な遺跡としては、淡路島の多数の石製鍛冶工具類などの出土品が発見された五斗長垣遺跡と青銅器の銅鐸などを製造していた大阪府茨木市の東奈良遺跡や奈良県磯城郡田原本町の唐古•鍵遺跡などが上げられる。畿内が経済圏の拠点になったのは、日本列島の西日本の東に位地し、東海•中部•関東地方の縄文人の末裔が文化の進んだ北部九州に進出地点だったからです。物部氏も大伴氏も中臣氏も東日本の縄文人であり、海人系の尾張氏や海部氏、更には安曇氏や息長氏など、ヤマト王権で「連」のカバネを持つ氏族でした。

東日本の縄文人の末裔達がこの時期に必要としていたのは、中国の政治組織でした。日本を動かすことが出来る官僚体制の確立だったようです。そこで、目を付けたのが、北部九州で中国での政治機構に詳しく氏族を大和の地に呼び寄せようとした。この当たりの歴史資料がないので、『古事記』の神話となります。イザナギとイザナミが結婚したくだりでは、国産みとして、淡路島・四国・九州・隠岐・壱岐・対馬・佐渡そして、最後に本州を泥沼をかき回して作ります。これは何を表しているか。縄文人の末裔の氏族と鉄器生産を主にした氏族との合意による支配を表しているように思われます。最終的に、淡路島で合意が成立したかんも知れません。四国・九州・隠岐・壱岐・対馬という鉄器を主にした氏族と佐渡などの東日本の氏族が本州を治めることに。イザナギは、その東日本の縄文人の末裔を表しているように思える。イザナミは、イザナギとの子を産んだ時に大火傷を負って、出雲地方の里にこもります。この神話から、イザナミは出雲地方の鍛治集団の娘だったと思われます。このイザナミも中国大陸や朝鮮半島との関係がありそうな渡来人、もしくは北部九州や出雲地方に勢力圏を持った氏族だったかも知れない。

北部九州の勢力が大和に向かった神話があり、それは神武東征。神武天皇が日向から、葦原中国を治めるため、東に向かうことを決めた時、それに同行させたのが、手下のミチノオミとアメノコヤネと皇族一行だった。神武天皇が存在したとして、日向は何処だったのだろう。それと同行した手下のミチノオミは大伴氏の祖とされ、アメノコヤネが祖としている中臣氏。このことは、大伴氏も中臣氏も元々は、東日本の縄文人の末裔。とすると、この神話は、飛鳥時代から奈良時代にかけての逸話であり、信憑性が薄い。ただ、これが事実だとした場合、時代の設定が違うが、九州にいた天皇になるべき人を東日本に勢力があった氏族が、九州まで向かいに行ったことになる。神武東征で、神武天皇一行が広島県の安芸に７年間、岡山県の吉備に８年間滞在している。この地は、吉備氏族の本拠地で、山陰の出雲地方の鉄鉱石の産地に近い。ここで後のヤマト王権の財源を貯めたのではないだろうか。その鉄鉱石を淡路島の鍛治集団まで運んだ。そう考えると理にかなうことになる。また、吉備氏族は、吉備の地で皇族との血縁関係を持った可能性があり、奈良県磯城郡田原本町の唐古・鍵

遺跡からは梅の種化石が大量に発見されている。大和の地に吉備の縄文人の末裔が流れ込んで、集落を形成した。この唐古・鍵遺跡には、東海地方の縄文人の末裔も同居していた。

神武天皇一行は、吉備を後にして、播磨灘から、河内湾に入る。河内湾を過ぎれば大和の地、そこで待ち伏せしていたのが、物部氏系の長髄彦だった。前にも述べたように、大和を物流の拠点としていた物部氏族は、葦原中国を治めるために東征した神武天皇一行と戦って、大和入りを阻んだ。最終的に神武天皇一行は和歌山県の熊野から大和入り。そこで、物部氏族は、神武天皇の家臣になる。これは大和の地において、縄文人の末裔である東日本の物部氏族が支配していたところに、神武天皇の皇族が招かれたことになり、神武天皇が俗に言う婿養子に入った形になる。

この神武東征の話は、『古事記』には、神話として扱われている。神武天皇の以下の皇族がどこから、どのようにして、大和に入って、ヤマト王権を立ち上げたのか、謎に包まれている。ただ、奈良県の纒向遺跡周辺に第 10 代崇神天皇は存在していたことは確かな事実です。崇神天皇の以前の大和は、縄文時代晩期が過ぎ、弥生時代前期頃から、東海地方の縄文人の末裔が原始的経済の拠点にしていたのではないだろうか。

この『縄文王朝論』では、便宜上、氏族の名前を使ったけれど、氏族の名称は、ヤマト王権が誕生してから、或いは飛鳥時代までに付けられたと思われる。ただ、縄文人の末裔同士の集団が結束して存在していた。ヤマト王権が発足したのがいつ頃かは分からないが、地方に小国家の大王が存在し、ヤマト王権が発足すると同時に、それらの地方の大王は、国造に任命されている。それまでの経過としては、弥生時代前期に北部九州を中心に、日本各地で小国家が誕生している。それらの小国家は、縄文人の末裔によって運営されていたと思う。前漢を初めとする王朝が日本に対して倭国と示したけれど、実際に倭国という王朝は日本には存在しなかった。現在、倭国と言う名称は、古代歴史を述べる上で、便宜上使用しているだけです。飛鳥時代、当時の大和朝廷は、唐との外交交渉において、日本のことを倭国と述べている場合もあったが、天武天皇の時代には、唐に対して「日本」と国名を提示するよになった。また、縄文人の末裔は古代の日本人と理解して頂いた方がいい。縄文時代が長く続き、その間に日本に渡来した人は殆どなかった。純粋の日本人です。北部九州の縄文人は、中国や朝鮮半島から流れてきた人達と混血し、純粋性を失っていくが、東日本の縄文人は弥生時代になってもその純血を守っていた。「縄文人によって王朝が誕生した」という仮説を提案してみた。